

## 自閉症児療育キャンプにおける支援学生の思い

一門恵子・古閑法子<sup>1)</sup>・佐々木順二

Changes in feelings of volunteer college students in a therapeutic camp for autistic children

Keiko ICHIKADO, Noriko KOGA and Junji SASAKI

自閉症児を対象とした療育キャンプ（通称やまびこキャンプ）における参加児の活動状態に応じた支援担当学生の「思い」について分析、検討した。参加児17名は、8～18歳の男児13名、女児4名であった。調査対象は、直接子どもを担当した本学学生24名で、男子9名、女子15名であった。自由記述式のアンケート調査をキャンプの1週間後に実施した。回収率は100%であった。学生の「思い」のカテゴリー分析は著者らの合議による。結果は454のカテゴリーが抽出されたが、内訳は、ポジティブな思い（喜び・安心・安堵など）229（65.9%）、ネガティブな思い（不安・心配・苦慮・困惑など）199（43.8%）、中立的思い26（5.7%）であった。学生たちの「思い」には子どもの逸脱行動の生起が大きく関与していた。

キーワード：自閉症児療育キャンプ、学生ボランティアの思い、ポジティブ・ネガティブな思い

### I 問題と目的

自閉症は、対人的相互反応の質的障害、コミュニケーションの障害、行動や興味の限局・常同的・反復的行動などを呈するかなり複雑で重篤な障害と言える。そのため集団生活適応の困難や多様な学習面のつまづきを伴うことが少なくない。彼らにとって、キャンプという非日常的な集団活動に参加することは、彼らに社会参加の機会を提供し、その社会性を高めることにつながるものと思われる。

1960年代の後半から自閉症児の療育・教育が注目されるようになり、1970年代に入って各地で療育キャンプが実施されるようになった。表1にその一部を掲載した。初期の対象児と家族の両プログラムを並行実施したもの（名和，1971；小林，1977）から、きょうだい児のためのキャンプ（森他，1995）、動作法による集中療育（笹川他，2000；川間他，2004）、さらに、近年ではイルカとのふれあい効果を目ざしたドルフィンキャンプなども実施されている。しかし、多くは一般のキャンプ

プログラムと似たレクリエーション中心の内容で構成されている（篠崎他，2000；木谷，2001；岡本他，2009；一山他，2010）。また、福原（2003）の報告は、対象者を高機能やアスペルガーの子どものみに限定したものである（表1）。

従来報告は、参加対象者にとってのキャンプの効果について報告されたものである。

本稿は、療育キャンプにおいて実際に自閉症児の直接の支援者としてキャンプに参加した大学生たちが感じた、キャンプ中の担当児の行動の変化に伴う「喜び」「不安」「葛藤」などの「思いの変化」について分析的に捉えることを目的とするものであり、結果を今後のキャンプ運営に活用できればと考えた。

### II 方法

#### 1. 対象者：

療育キャンプに参加した17名の自閉症児を個別に担当した学生24名を調査対象とした。男子9名、女子15名で、1～4年の学部生である。（表2）

#### 2. 療育キャンプのプログラム：

期間は、200X年8月中旬の2泊3日。プロ

<sup>1)</sup> 本学自閉症支援部療育スタッフ・本学大学院人文学研究科障害心理学専攻2007年度修了

表1 自閉症キャンプの報告

報告者	種類	通称	対象	主催	キャンプ長	スタッフ
名和顕子 (1971), 小林隆児他 (1977)	集団療法キャン プ	朝日	4~12歳 41~57名	朝日新聞西部 厚生文化事業 団	大学教員	集団治療機関で活動するセ ラピスト
森司朗他 (1995)	きょうだいキャン プ		小学1年 ~21歳		大学教員	
篠崎久五他 (2000)	レク中心キャン プ	やまびこ	8~18歳, 17名	日本自閉症協 会熊本県支部	大学教員	臨床心理士, 教諭, 看護師, 大学生
笹川えり子他 (2000)	動作訓練キャン プ	心理リハ ビリテー ション キャンプ	全数は未 記載, 事 例4名	未記載	未記載	日本心理リハビリテーショ ン学会認定のトレーナー, 訓練アドバイザー等
松崎くみ子他 (2001), 大多和絵里他	ドルフィンキャン プ		3~4名		大学教員	医師, 心理士, O T, イル カトレーナー
木谷秀勝 (2001)	レク中心キャン プ	わかすぎ	4~21歳, 16名	わかすぎ自閉 症キャンプ実 行委員会	大学教員	精神科医, 臨床心理士, 教 諭等
福原和美 (2003)	レク中心キャン プ高機能自閉 症・アスペル ガーキャンプ	阿蘇コス モス	幼児・児 童, 22名	熊本 Y M C A・日本自閉 症協会熊本県 支部	専門学校 教員	グループリーダー, サブ リーダー, パートナース タッフ (学生)
川間弘子他 (2004)	動作訓練キャン プ		3~17歳, 24名	NPO 法人山 口発達臨床支 援センター	発達臨床 支援者	日本心理リハビリテーショ ン学会認定のトレーナー, 訓練アドバイザー等
岡本悟他 (2009), 一山幸子他 (2010)	レク中心キャン プ	さくら生 活教育 キャンプ あぞら おぞら 社会適 応キャン プ	幼児~小 学低学年 15-18名 小学低学 年~成人 15-18名	西日本短期大 学, 福岡精神 発達障害療育 研究会	大学教員	大学教員, 大学生

表2 キャンプ参加者の特性

年齢	性別	療育手帳*	学年	学校・学級 種別	療育への参加	担当 学生	性別	学年	担当 学生	性別	学年	担当 学生	性別	学年	
A	8	F	B <sub>2</sub>	小3	支援学級	○	St.1	F	1						
B	8	M	B <sub>2</sub>	小3	支援学級	○	St.2	M	3						
C	9	M	なし	小3	支援学級		St.3	M	1	St.4*	F	3	St.5*	M	4
D	9	M	B <sub>2</sub>	小4	支援学級		St.6	M	1						
E	9	M	B <sub>1</sub>	小4	支援学級	○	St.7	F	2						
F	10	M	B <sub>1</sub>	小4	支援学級	○	St.8	F	1	St.9	F	2			
G	10	M	A <sub>2</sub>	小4	支援学級	○	St.10	M	1	St.11	F	3			
H	10	M	B <sub>2</sub>	小4	支援学級		St.12	F	3						
I	11	M	B <sub>2</sub>	小5	支援学級	○	St.13	F	1	St.14	F	4			
J	11	M	なし	小6	通常学級		St.15	F	4						
K	13	F	A <sub>2</sub>	中2	支援学校		St.16	F	1	St.17	F	4			
L	13	M	A <sub>2</sub>	中2	支援学級		St.18	F	3						
M	14	F	A <sub>2</sub>	中2	支援学校		St.19	F	2						
N	14	M	A <sub>2</sub>	中3	支援学校		St.20	M	3						
O	15	F	B <sub>2</sub>	中3	支援学級		St.21	F	4						
P	15	M	なし	高1	支援学校		St.22	M	4						
Q	18	M	A <sub>2</sub>	通所	支援学校卒		St.23	M	1	St.24	M	4			

注1) 項目欄「療育手帳」の判定基準は知的障害のレベルに行動特性を加味して判定される。A<sub>1</sub>=最重度, A<sub>2</sub>=重度, B<sub>1</sub>=中度, B<sub>2</sub>=軽度

注2) 項目欄「療育への参加」にいう療育は本学で土曜日に実施している自閉症学童療育を指す

注3) 担当学生中、\*St.4, St.5の2名は2日め途中で担当を交代した

グラム内容は、表3に示す通りである。

場所は、県央にある日本一の石段（3,333段）近くに位置する小学校の廃校を利用した宿泊施設で実施した。

3. キャンプ構成員：

対象児17名の他に、キャンプ長（本学教員）、副キャンプ長2名（本学教員，特別支援学校教員：療育スタッフ）、看護師1名，レクリエーションスタッフ1名，準備担当の自閉症協会キャンプ担当者2名，子ども担当学生24名，準備担当学生14名（学生は全員が本学在籍）であった。

なお，本キャンプは親の会である日本自閉症協会県支部の主催する療育活動の一環として，年間計画に組み込まれている。

4. 手続き：

キャンプ終了後に，各学生にプログラム内容の時系列に沿った担当児の行動とその時の学生の思い（安心・不安・喜び・辛さ・葛藤等）について，自由記述方式でアンケート調査を実施した。質問形式は「対面式からキャンプ終了までの活動であなたが感じられた、考えられた思いを自由に記入願います」として3日間のプログラムに沿った記入表を渡し，個々のプログラム時の子どもの様子とそれに伴う学生の思いを記入してもらった。回収率は100%であった。なお，報告文のカテゴリー分析は，著者らの合議によって行った。

5. 倫理的配慮：事例の掲載については保護者の了承が得られたものである。

表3 200X年やまびこキャンププログラム

Time	1日目	Time	2日目	Time	3日目
		6:30	スタッフ起床	6:30	スタッフ起床
		7:30	子ども起床	7:00	子ども起床
		8:00	ラジオ体操	7:30	ラジオ体操
		8:20	朝食	7:50	朝食
		8:50	うどん作り（前半）	8:30	片付け
		9:50	レクリエーション	9:00	表彰式・閉会式
		10:35	うどん作り（後半）	9:40	宿泊地出発
		11:35	自由時間	11:30	大学到着・解散
12:30	スタッフ集合	12:10	昼食	12:00	スタッフ反省会
		12:40	記念品作り		
13:30	大学 集合				
14:00	出発式	14:00	プール		
14:30	出発				
		15:30	おやつ		
16:00	日本一の石段昇り挑戦	16:00	入浴		
17:00	バス集合	17:00	バーベキュー準備		
17:45	宿泊地到着				
18:10	夕食	18:00	バーベキュー		
19:00	入浴（前班）				
19:30	キャンプファイヤー	19:30	ゲーム		
20:30	入浴（後班）	20:30	就寝準備		
21:00	就寝準備	21:00	就寝		
21:30	就寝				
	スタッフミーティング		スタッフミーティング		



写真1：1日目 石段昇り



写真2：2日目 うどん作り

### Ⅲ 結果

#### 1. 2事例における学生の「思い」

##### 1) 子どものマイペースな行動に「不安」に陥りがちだった学生の事例

表4-1に、多動傾向のあるカナタイプの小4男児（療育手帳A<sub>2</sub>）のキャンプ中の行動とそれに伴う担当学生の思いについて示した。学生は療育経験もあり、前年度のキャンプでも本児の担当であった。前回のキャンプで、パニックや眠らない等の課題があったことから、初日から今回はとにかく無事に過ごせるようにとの思いが強かった。本児は往路の車中で熟睡した。降車後石段までの徒歩約15分では、店舗に入り込む、川の流れに近づく、車道に飛び出しそうになるなどの行動に担当学生は「ハラハラ、ヒヤヒヤ」の緊張状態になった。石段到着後は、課題達成後の褒美のかき氷にこだわり「かき氷」と言い続けた。夜のキャンプファイヤーでフィナーレの打ち上げ花火が嫌いで部屋に籠り、電気を消して耳を塞いで耐える。学生は嫌悪刺激を回避したい本人の思いに対し「配慮」して見守っている。描画活動が好きな本児は、レクやゲームなどの集団活動には参加せずに、宿泊室で独り絵を描いて過ごすことが多かった。学生は子どもの行動を「尊重」して集団参加を強制はしていない。

学生は本児の部屋の電気を突然消して他児のキャーと驚く反応を喜ぶ行動に、他児のパニックなどの心配をしたり、危険な急坂を下りてカニ捕りに向かったりする行動に「不安」「心配」な思いに繰り返し襲われ「疲労」のためにやや「辛い」

思いのキャンプとなっている。

##### 2) 子どもとかみ合いにくく「葛藤」に陥りがちだった学生の事例

表4-2に、固執傾向の強い定型自閉症の中学2年女児のキャンプ中の行動と担当学生の思いについて示した。この事例では出発前の集合時間帯での対応から課題が担当者に突き付けられた。女生徒の痛みを伴う過度なくすぐり行動に対して、つい「痛い、しないよ」と叱り、対象児のパニックを誘発してしまったのである。学生は本人のくすぐりのコミュニケーション的意味合いを尊重してかかわってあげればと強い「後悔」の念を抱いている。

しかし、その後はケロツとして汗だくで石段を昇る姿に、学生はむしろ「驚き」を感じている。初日のかかわりの中で、くすぐり行動をうまく遊び化できることに成功し、「安心」にたどり着いている。

2日目も「うどん作り」で手伝おうとした学生の手を（一人ですると）払いのけた対象児の行動に、再び学生はショックを受け、自主性を尊重すべきであったと強く「後悔」の念を抱いている。最終日もまた、対象児の指の皮をむく自傷的行動に出会い、中断を求めた結果、再びパニックに陥り「大嫌い!○○ちゃんが良かった」との担当学生交代の訴えに強いショックを受け、担当者はまたもや揺さぶりをかけられ「葛藤」に至っている。本児のかかわりの難しさは、本来のこだわりの強さに思春期特有の反発心が加わっている。

表4-1 子どものマイペースな行動に「不安」に陥りがちだった学生の事例

プログラム	子どもの行動	学生の思い	サブカテゴリー
<b>1日目</b>			
対面		昨年のキャンプでのパニック、睡眠障害がプレッシャーになり、不安だった。	昨年のことがプレッシャーで「不安」
出発	顔色良く元気でウキウキ状態	2泊3日何も起こらず元気に過ごせるようにと思った。	2泊3日の無事を「祈り」
往路車中	持参のおもちゃで遊び、眠くなって石段下まで爆睡	バスの中でキャンプのお約束をする。守ってくれるか不安だが、信じようと思う。	約束を守るか「不安」だが「信用」
石段	石段下までにお店に入ったり川に行ったり、道に飛び出そうとする。昇り始めからずっと「かき氷」と言っていた。	気が抜けずハラハラした。注意にも返事のみがよく、約束は守ってくれず、興奮もしておりヒヤヒヤした。	あちこちへ走り出し「緊張」
キャンプファイヤー	火花が嫌いで外に出られず、耳を塞ぎ電気も消して部屋に籠っていた。	大丈夫と声かけをしながら、危ない所に行かないよう気を配った。	音から逃げ出したい気持ちに「心配り」
自由時間	お絵描きに夢中になったり、みんながいる中で部屋の電気を消し「キヤー」という反応を見たがる。	急に電気を消してトラブルになり、他児がパニックを起こさないようにするのが大変だった。	トラブルからパニックにならないよう「心配」
<b>2日目</b>			
うどん	作業開始を待たずにうどん作りを始めた。楽しそうだった。	楽しそうで良かった。上手くできなくても挑戦する姿を頼もしいと感じた。	挑戦する姿を「頼もしく感じる」
レク	参加せず部屋でお絵描きとおもちゃ遊び。	一緒に楽しく過ごした。レクには参加できなかったが、楽しそうにしており無理やり連れて行くのは止めた。	対象児の思いを「尊重」
記念品	お手本を見て描いた。	ペンの貸し借りで他児とトラブルが起きた。借りられずパニックにならないか不安だった。	ペンを借りられずパニックにならないか「不安」
プール	一番の楽しみで、とてもはしゃぎ楽しんだ。	楽しそうな姿を見られて良かった。 プールで疲れて夜は熟睡できたらいいなと願った。今夜は薬が早く効くようにと願った。	楽しそうで「安心」 夜熟睡できるように「願い」
BBQ	満足するまでもぐもぐと美味しそうに食べた。	去年のパニックを思い、不安だった。学生はまともに食事ができず辛かった。	パニックが起きないか「不安」
ゲーム	参加せず部屋でお絵描きとおもちゃ遊び。	2日間の辛さがきて、体力的に限界だった。	疲れが相当出て「辛い」
自由時間	お絵描きとおもちゃ遊び。カニ捕り	カニ捕りで危ない所に行こうとし、ビリビリした空気があった。	危ない場所へ行く「心配」
<b>3日目</b>			
閉会	落ち着きがなく、途中から参加した。	注意しても「ハイ」の返事のみで、どうすればよいのかと不安だった。	返事は良いが落ち着かず「不安」
帰路車中	落ち着きがなかった。	2泊3日も終りという安心感をどっと胸に感じた。ケガもなく、良かった。	キャンプが終る「安堵」
<b>全日</b>			
食事	お箸で遊んだり、いろいろなところを汚して、遊び食べをしていた。	後始末が大変だったが、美味しそうにできて良かった。	遊び食べの後始末で「困惑」
入浴	特にトラブルはなかった。		

表4-2 子どもとかみ合いにくく「葛藤」に陥りがちだった学生の事例

プログラム	子どもの行動	学生の思い	サブカテゴリ
<b>1日目</b>			
出発	くすぐりを強く入れてくる。力が強くて避け難く、母親、担当2人が叱るとパニックになった。	「痛い、しないよ」と叱りパニックに。くすぐりはコミュニケーションを取りたい時に使うのを忘れて叱ってしまい、激しく後悔した。	ふれ合いたい気持ちに応じられずにパニックにさせて「後悔」
往路車中	外を見ながら気分を落ち着かせていたようだ。手遊びは楽しそうにやっていた。	出発式のパニックをずっと反省していた。今後は本人の思いを受け止めた楽しいキャンプになるよう努力したい。	思いを受けとめ、楽しいキャンプにしようとして「決意」
石段	汗だくで昇っていくが、学生が遅れると待っていてくれた。ゴールは手をつないで一緒にセーの。	車中で気持ちの切替えができて安心した。その切替えの早さに驚いた。 石段で手を繋いでくれたことで仲良くしたい思いが伝わり、嬉しかった。	早く気持ちを切り替えられた「驚き」 仲良くしたい思いが伝わり「嬉しい」
キャンプファイヤー	火の女神になりドキドキしながら櫓に点火した。楽しそうに身体を動かしていた。	キャンプの恒例行事で慣れており落ち着いて、私自身も楽しめた。たくさん笑顔に嬉しかった。	笑顔をたくさん、頑張る姿に「喜び」
自由時間	折り紙をしたり、寝転がってくすぐりっこをして遊んだ。	思い切ってくすぐりをやると嬉しそうにお返しをしてきた。痛さを適当にかわしながら返しをしてきた。痛さを適当にかわしながら遊べて本当に嬉しかった。	くすぐりで遊ぶことができて「安心」
<b>2日目</b>			
うどん	積極的に参加した。手伝うと「する！」と手をはらい、意志の強さをみせた。	手をはらわれ去年との違いに戸惑った。的確な支援が出来なかったと後悔した。	自主性への的確な支援を講じられず「後悔」
レク	参加しないで寝とくと言っていたが、少し休み、行くと言い、積極的に参加した。	レクをとっても楽しんだ様子で嬉しかった。	結果的に積極的な参加で「喜び」
記念品	トースターの中を見たくて、ずっと前で座って見ていた。	記念品作り担当のため、本人から離れていた。	
プール	シンクロと言ってプールで逆立ちしたり、水かけをして遊んだ。	マイベースに泳ぐことが多く、少し寂しく見守った。	1人で泳ぐのを見守りながら「少し寂しい」
BBQ	おにぎりや野菜の量を自分で決めて食べていた。	朝は「野菜は絶対食べません」が「野菜も食べます」に変わり感心した。葛藤しながら答えを出している、本人を支えられるよう頑張ろうと思った。	苦手な野菜を食べる、葛藤しながら答えを出している子へ、それを支えて頑張ろうと「決意」
ゲーム	とてもニコニコで楽しんだ。初めての絵合わせに興味津々だった。	ビンゴはなかなかリーチが出ずに不安そうだったが、上がったので安心した。私も一緒に絵合わせを楽しんだ。	リーチ後はすぐに上がれて「安堵」
自由時間	前日同様に折り紙とくすぐりっこをしたが、ボウとして過ごす時間が多かった。	本人はこの日、反抗的な態度も多かったが一緒に遊んで心理的な距離が近くなったので嬉しかった。	反抗を示しながらも遊びの中で心理的距離が近づき「喜び」
<b>3日目</b>			
閉会	指の皮むきをし気逸らしでせず、ダメと否定しパニックになる。「大嫌い、〇〇ちゃんが良かったのに」と言った。	本人の指皮を剥ぎたい気持ちと、それを止めさせようとの狭間で冷静に対処できなかった。	止めさせるべきかと「葛藤」大嫌い、他の学生が良かったと言われて「悔しく、悲しい」
帰路車中	ずっと外を見て、時々ウトウトしていた。	最初と最後のパニック生起を後悔し、別の対応で回避できたかとも反省した。また、この4年間何を学んだのかと考えた。親御さんにも心配をかけて落ち込んだ。	子のパニックで大きな「葛藤」、対応が上手いかずには落ち込んで「悲嘆」
<b>全日</b>			
食事	好き嫌いをなくしっかり食べていた。ゆっくり食べようと促すと、イヤだよと反発した。	ゆっくり食べようと促すと拒否され、逆に早く食べてしまった。対応をどうしたらいいか悩んだ。	ゆっくりの指示に反発され「苦悩」
入浴	マイベースに落ち着いて入浴した。	入浴動作はほとんど自立しているので、安心して見守ることができた。	見守りだけで済み「安心」

## 2. 全体的傾向

キャンプ終了後に実施したアンケート調査で各学生の思い（安心・不安・喜び・辛さ・葛藤等）をカテゴリー分類すると、総数454の中でポジティブな思いは229（50.4%）、ネガティブな思いが199（43.8%）、いずれでもない中立な思いが26（5.7%）の3つに分類され、さらにポジティブな思い18種、ネガティブな思い30種、中立な思い6種と合計54種のサブカテゴリーに分類された。

このサブカテゴリーの内容は、ポジティブな思いでは「喜び」72、「安心」57、「安堵」43、「感心・感動・感激」14が上位を占め、ネガティブな思いでは「不安」および「苦慮・困惑等」が33で同じ、「心配」28、「後悔・残念・自责等」が26、「葛藤・迷い」19、「反省」と「戸惑い・当惑」が12で並ぶ。上述よりは少数ではあるが、ポジティブなものでは「希望・期待」9、「驚き」9、「満足・充実感」9、「共感・受容」7などがあり、ネガティブなものでは「緊張」7、「悔しい・無力感」7、「疲労・辛い」7などがあつた。

また、上記の思いに至った経緯についてみると、

思いの誘因として子どもの「逸脱行動」と「支援の工夫・仕方」が関係しているものがあつた。子どもの逸脱行動が原因で生じられたものに「安堵」19（その内、回避15、解消4）で、「不安」10、「心配」9、「苦慮・困惑」3であつた。また、支援の仕方が見出せずに「苦慮・困惑」15、支援の工夫の成功が「喜び」6、「安堵」6をもたらし、支援の工夫がうまくいかずに「反省」5、「不安」4、「心配」2の思いが報告された。これらは対象児が自閉性障害をもち、こだわりが強く、対人関係に課題をもつことに関係している。

このように、喜びや安心を感じ、不安や心配で子どもを支援する担当学生の悲喜こもごもの様子が伝わってくる。個別に見てみると、さらに深刻な状況に直面した学生の思いもある。例えば、帰路車中で「苛立った様子で担当学生をつねることをズッとやり」、これに対して学生は子どもの疲れやストレスから起きたと考え、苦痛を我慢して耐えている。別の事例では「他児が遊んでいたものを取って衝突し、引き離されたことで担当学生に怒りをぶつけた」子どもがいる。これに対し、

表5-1 カテゴリー分類

区分	数	%
ポジティブな思い	229	50.4%
ネガティブな思い	199	43.8%
中立な思い	26	5.7%
合計	454	100.0%

表5-2 学生のポジティブな思い（サブカテゴリー）

項目	思いの背景	詳細	数		
喜び（含：嬉しい・楽しい）	72	通じあえた	25		
		幸せそう・楽しそう	16		
		成長	8		
		参加	8		
		支援の工夫が成功	6		
		安心	57	無事遂行	17
				無事参加	16
				通じあえた 10	通じあえた 4
					協調性をみて 4
				指示が通る 2	
安堵	43	食べた・寝た	8		
		逸脱行動 19	回避 15		
			解消 4		
		支援の工夫が成功	6		
		やっと終わった	5		
	参加・遂行	4			
感心・感動・感激・感涙	14				
驚き	9				
希望・期待	9				
満足・充実（感）	9				
共感・受容	7				
決意	6				
意欲	3				
合計	229				

表5-3 学生のネガティブな思い (サブカテゴリー)

項目	思いの背景	数
不安	逸脱行動	10
	初担当・未経験	7
	支援の工夫	4
	昨年の行動	3
	拘り	2
	危険	2
苦慮・困惑	支援の仕方	15
	逸脱行動	3
心配	逸脱行動	9
	危険・ケガ	3
	食べ過ぎ	3
	支援の工夫	2
後悔・残念・自責		26
葛藤・迷い		19
反省	支援の工夫	5
戸惑い・当惑		12
緊張		7
悔しい・無力感		7
疲れ・疲労・辛い		7
悲しい(み)・寂しい(さ)		5
詫び		4
苛立ち・嫌悪・抵抗		3
願い		3
合計		199

表5-4 学生の中立的な思い (サブカテゴリー)

項目	数
気配り・配慮	12
気づき	5
解釈	3
推察	3
理解	3
合計	26

学生はそれ以前にも子どもから拒否されたりしており、無力感を感じ泣いてしまっている。全ての学生がこのように深刻で辛い思いを体験したわけではないが、コミュニケーションスキルの弱さと情動コントロールの困難さをもつ子どもの特性が学生のキャンプでのつらい思いに現れているとみている。

しかしながら、大変辛い思いを抱えてもなお、学生たちはキャンプに毎年継続して参加している。これは、療育キャンプが自閉症協会主催で本学自閉症支援部に委託されているため、任意参加の単発の行事として行われるのではなく、通常の療育活動の一環として行われているためと考えられる。すなわち、学生たちは療育活動の年間行事としてキャンプを位置づけており、事前の準備活動から動機づけを高めていく。それゆえ、学生たちは互いに連帯感をもって、辛くてもキャンプ終了まで頑張り、次年度も継続していくことになる。

#### IV 考察

筆者らは8月中旬に実施した自閉症児療育キャンプで、参加児17名と直接個別に対応した学生24名に対して、活動内容ごとの子どもの行動をとおして感じた自身の思いについて質問紙調査を実施した。その結果、454のサブカテゴリーが得られ、内、ポジティブな思い229 (50.4%)、ネガティブな思い199 (43.8%)、中立的な思い26 (5.7%)となった。以下、このような学生の思いの生起に関わる要因について、①学生要因、②子ども要因、③相互関係要因、④プログラム要因に分けて検討する。

##### ① 学生要因：

学生に過去の療育キャンプで子どもを担当した経験がない者がいるか調べたが、2年次生以上では全員が担当経験者であり、1年次生は子どもに初めてつくわけであるから、経験での検討はできないとなった。学生要因として次にあげられるのが性格によって、対応の取り方が変わり、思いも違ってくことを考えた。これについては、学生の報告内容から彼らの性格を察することができ、おお

らかな学生は子どもの行動にそれほどネガティブに反応していないかもしれない。繊細な学生だと期間中のやや緊張した雰囲気が調査した文面から伝わってくるので、逆説的に朗らかな学生の鷹揚な構えが窺える。

## ② 子ども要因：

子ども要因では2つの特徴が見られる。1つは学生の報告をみると、担当児が活動へ参加すると「安心」「喜び」に繋がり、活動へ参加しない場合には「不安」「心配」な思いを抱いた学生が多い。

その一方で、参加した子どもの自閉性障害の重篤さ、対人関係のとり難さ、あるいはキャンプ開始時期の心身の不調、思春期にある参加児の過敏な反応などがその行動面に影響して、活動参加や担当学生との関係を難しくした事例がある。ある子どもは開始直前から不調が続き、往路の車中で他児と衝突したのを皮切りにいろいろな活動で叫び声や衝突を繰り返した。自閉症者の多くは大声を苦手とするため、子どもによっては不機嫌を呈し、その結果担当学生らに「不安」や「心配」の思いを増大させてしまった。参加児の障害の重篤さや対人関係のとり難い例は、本稿、表4-1、4-2で示したように、学生を「不安」や「緊張」にさらし、「葛藤」や「無力感」を生起させてしまった。石山他（2011）は特別支援学校高等部の生徒を対象とした自然体験塾にボランティアとして参加した学生の「負担感」として以下のような事項を挙げている。学生たちが「負担感」を抱いたのは、予想外の行動をとられた場合の対応、やりとりの難しさ、自分の対応の不甲斐なさや認識不足、こだわり行動への対応などであった。そのため、可能な限りの情報提供があれば負担感が軽減されただろうと考察されている。筆者らのやまびこキャンプでは保護者から事前に情報を収集した上でキャンプに臨むが、非日常的活動であり、一時的な集団の形成であるためか、状況によっては学生の負担が増える事態が生じた今後は、さまざまな状況を想定して、参加児に関する事前の情報確認・協議をより慎重にやる必要があろう。

また、思春期にある子どもが活動参加をほとんど拒み続け、担当学生を何度も蹴ったりした。さらに帰路の車中でも担当をつねる行為をやり続けてしまったが、担当学生は「苦慮」しながら耐え

ている。森山（2009）は幼稚園から特別支援学級・特別支援学校の高等部までに在籍する自閉症児童・生徒112名の担任教員に対して、子どもの挑戦行動について調査し、約半数が他者を叩くなどの挑戦行動があると報告しており、学校教育の場でも対応に苦慮していることが分る。

## ③ 相互関係要因：

相互関係とは子ども対子ども、子ども対学生、および学生对学生のような他者との関係で生じた思いをさし、1つは逸脱などのトラブルを起こす子どもがいて、前述した大声への反応の他に、自己と逸脱行動を示す子を同一視し、自分がトラブルを起こしたような気持ちで不快を示したと学生が報告している。その結果、学生にも不安が伝わり、子どもと学生相互がネガティブな感情に陥っている。

特異な例として、衝突を繰り返す子どもの担当学生に「近寄らせないで」と拒否し、学生を戸惑わせた例がある。

学生間では子どもが「あっちの学生がいい」と他児の担当学生をプールで独占したので、直接的な学生間での思いには触れていないもののお互いのやりづらさを微妙に表現して、「役割交代になってしまった」「(取られた子)に申し訳ない」としている。

## ④ プログラム要因：

活動プログラムは(1)動く活動：石段昇り、プール、レクリエーション、(2)つくる活動：うどん、記念品、(3)遊ぶ活動：ビンゴ、絵合せ、(4)観る活動：キャンプファイヤー、花火と4種類の活動特性に分けられる。

この内、比較的障害の程度に関わらずにどの子どもも活動に参加できたのが「つくる活動」であった。うどんは昼食の食材で、食べるという強化子がつく。プラスチック板に絵を描く「プラ板遊び」もキャンプの記念品として持ち帰ることができるので、描画活動の魅力と相まって楽しく参加できる。その他で活動参加が良好なプログラムは、動く活動の石段昇りとプール、遊ぶ活動のビンゴがある。石段は到達目標1000段が明確で速さも競えるという特性がある。プールは子どもの夏遊びの定番で、元来多くの子どもに親しまれるものであり、殊に自閉症児は水への関心が高い子

どもが多く、モチベーションが高いため参加が良好である。ピングゲームは指定された数字が縦横斜めに並ぶと上がれるので、数字や方向性という特徴がルール習熟に関係なく楽しめ参加できる特性をもっている。

一方、参加する子どもが減る傾向にあるのはレクリエーション、キャンプファイヤー、花火の活動である。特に花火は音への恐怖からその場を離れたり、部屋で耳を塞ぐ子どもが出てくる。花火の前のキャンプファイヤーは参加できる子どもも多いが、炎への対応など、担当学生を「緊張」させることも生じやすい。レクリエーションはしっぽ取りと玉入れを行ったが、学生の報告では参加しない子が多い。ルールは簡単だが、しっぽ取りは相手のしっぽを走って奪うという他者との競合や、他者の行動の先読みを求められる特質をもち、自閉性障害児には理解や参加が難しいかもしれない。今回の調査を通して、参加しない子どもが出やすい活動を見直すべきではないかと考える。

以上、学生の様々な思いの生起に関わる要因を4つの視点から検討し考察してきたが、その中で次のようなやまびこキャンプの課題がみえてきた。

1つ目は活動プログラムの検討を必要と考える。前述のようにプログラムによって子どもの参加状況に差が生じている。活動に参加しやすいプログラムを工夫し、活動参加の難しい子どもが出やすいレクリエーションや花火などを見直して、場合によっては活動から除外することも考えたい。

2つ目は子どもを担当する学生への支援システム作りを図らねばならない。キャンプで生起する子どもの変化に彼らは戸惑いや困惑を示すことが多いと分った。支援の方法や工夫がすぐに見出されれば子どもも安定した状況へ戻っていく。一方、不安なあるいは危機的な状況に追い込まれていながら適切なサポートが得られなければ、さらに子どもと共に緊張状態に陥ることになる。この状況を回避する方法として、学生がキャンプスタッフに要支援の状況をすぐに伝え、スタッフを支援の担い手として利用できるシステムを構築することが考えられる。今までも学生間で課題状況の解消へ努力して、それでも解決できなければスタッフへ相談はしてきた。だが、まず学生がやってみて、それでも上手くいかない場合に相談を持ち込

まれることになり、状況が悪くなってからスタッフが対応することになる。共同執筆者の古閑は福原(2003)の阿蘇コスモスキャンプでのスタッフ経験も有するが、同キャンプでは対象児を直接支援する学生の上にグループリーダー、その上に専門スタッフを配置し、課題状況へ直面した時には即座に連携を取る体制が図られていた。このような支援体制はやまびこキャンプにも有効なシステムであると考えられる。

3つ目は基本的な生活習慣に課題をもっていることがあるという認識に立ち、支援をする必要がある。自閉症児はこだわりが強く、嗜好にも偏りが生じやすい特性をもつことから食事、入浴、睡眠、コミュニケーションなどにも問題が現れる。偏食が強く、好きなものだけを多量に早く食べる、身体洗いの未熟さ、対人交渉に弱さをもつことからくる他者との関係の取り方など多様な面で課題をもっている。事前に保護者から書面および面接で情報は得るが、予測しないことが起きて学生が慌てた例がいくつも見られた。この点は書面で得る情報には限りがあるためと思われる。また、キャンプ直前に不調に陥った場合などは情報が得にくいこともある。今回は直前の不調が尾を引いた子どもが集団内に緊張状況を作ってしまった。

## V最後に

本研究では、自閉症児のための療育キャンプで直接子どもの支援を担当した学生たちを対象にキャンプを通じた「思い」について把握した。学生たちは喜びや安心・安堵などのポジティブな思いと合せて、多くの不安・心配・苦慮・困惑等のネガティブな思いを抱いたことが解った。学生たちの思いは、自閉症児の集団活動参加の難しさや情動コントロールの困難さ等の特性に起因する逸脱行動やパニック等に左右されたものであった。キャンプ中に学生が問題にぶつかった時に、すぐに助言や援助を得ることができる機能的な支援体制を構築する必要性が示唆された。

## 謝辞：

やまびこキャンプで献身的にキャンプの運営に尽くしてくれた学生たち、さらに本調査研究に協力してくれた子ども担当の学生たちに心より感謝

し、お礼申し上げます。また、事例として掲載することを快くご了承いただいた保護者の方々に合わせて感謝申し上げます。

## 文献

- 米国精神医学会 (2003) : DSM-IV-TR 精神疾患の分類と診断の手引, 高橋三郎他訳, 医学書院
- 福原和美 (2003) : 阿蘇コスモスキャンプの効果—アスペルガー症候群・高機能自閉症児のキャンプにおける効果と評価における一考察—, (長崎) 純心福祉文化研究, 1, 89-95
- 一山幸子・木村裕子・吉村小百合 : (2010) 自閉症療育キャンプを実施して (2), 西日本短期大学社会福祉学科紀要, 7, (1), 41-57.
- 石山貴章・八波清彦 (2011) : 特別支援学校生徒に対する「ボランティア体験活動」から見てきたもの—「阿蘇わくわく自然体験塾」における取り組みの意義と課題—, 応用障害心理学研究, 10, 23-37
- 川間弘子・佐々木沙智・堀江幸治・川間健之介 (2004) : 自閉症児動作訓練キャンプ—認知発達段階と訓練課題および構造化の試み—, 山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要, 17, 103-112.
- 木谷秀勝 (2001) : 自閉症児・者の治療教育とサポートシステムに関する一考察—「わかすぎ自閉症キャンプ」の実践から, 山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要, 12, 19-26.
- 小林隆児・村田豊久 (1977) : 自閉症児療育キャンプの効果に関する一考察, 児童精神医学とその近接領域, 18 (4), 221-234.
- 松寄くみ子・古庄純一・佐藤弘之・杉原桂・赤井利奈・斎藤直子・松岡孝・伊藤真美・押野修司・川俣実・奥山真紀子・飯倉洋治 (2001) : 自閉症児に対するドルフィンキャンプの試み, 日本教育心理学会総会発表論文集 (43), 418
- 森 司郎・平川忠敏 (1995) : コミュニティ心理学と自閉症児治療療育 (18) —きょうだいキャンプの効果 2 : K 君の事例を通して—, 鹿児島大学文科報告第 1 分冊, 31, 45-59.
- 森山絵鯉子 (2009) : 自閉症児の行動と教育的支援に関する調査研究—熊本県内におけるアンケート調査を通して—, 九州ルーテル学院大学大学院人文学研究科障害心理学専攻修士論文.
- 名和顕子 (1971) : 自閉症児の療育キャンプ, 教育と医学, 19 (10), 61-69
- 大多和絵里・松寄くみ子・根本芳子・田村明紀子・柴田玲子・三浦有紀 (2003) : 自閉症児に対するドルフィンキャンプ, 日本教育心理学会総会発表論文集 (45), 101
- 岡本 悟・一山幸子・木村裕子・吉村小百合 (2009) : 自閉症療育キャンプを実施して, 西日本短期大学社会福祉学科紀要, 6, 1, 57-66.
- 笹川えり子・小田浩伸・藤田嗣道 (2000) : ダウン症児・自閉症児とその母親との相互交渉に及ぼす動作法の効果, 特殊教育学研究, 38 (1), 13-22.
- 篠崎久五・一門恵子・服部陵子・鳥岡信孝・河田将一・天津透彦 (2000) : 熊本の自閉症児療育学生ボランティア活動の歩み, 別府大学紀要, 42, 171-182

(2011.11.30 受稿, 2012.1.17 受理)

## Changes in feelings of volunteer college students in a therapeutic camp for autistic children

Keiko ICHIKADO, Noriko KOGA and Junji SASAKI

We investigated changes in feelings of volunteer college students in therapeutic camp for autistic children. Seventeen children, age range 8-18, 13 boys and 4 girls attended the camp. Twenty four students who supported an autistic child through camping answered questionnaires about their feelings for three camping days. We analyzed feelings of students into 454 categories, including 229 positive feelings such as joyfulness and relief , 199 negative feelings, such as anxieties and worries, and 26 other neutral feelings. Children's challenging behaviors strongly affected student feelings.

**Key words:** therapeutic camp for autistic children, feelings of volunteer students, positive and negative feelings